

映像による「物語」制作と対話による自立支援 ～「共感」から「行動の変化」へ～

公益財団法人横浜市国際交流協会 (YOKÉ) 多文化共生課 由衛 英樹

新たな試みへの挑戦 ～映像手法 Digital Storytelling～

今、日本に住む200万人を超える外国人は、それぞれが「言葉・文化・心」などの悩みを抱えながら暮らしています。そうしたなか、全国各地で、外国人と日本人の相互理解を深め、共存・共生していけることを目的に、大小さまざまな交流イベントが行われています。

当協会でもそうした交流イベントを実施してきましたが、人と人との対話・話し合いによって、外国人と日本人がさらに相互理解を深めるような新しい事業にもっと挑戦したいと考えるようになりました。

そうした矢先、アメリカで1990年代に始まったビデオ映像制作の手法「デジタル・ストーリーテリングDigital Storytelling」(以下、DST) のことを知りました。経験や思いを映像で伝えあい交流するこの活動は、今では世界各地の教育現場や社会活動に広がり、コミュニティーの形成、社会的弱者の支援、移民への外国語教育など、さまざまな社会活動に応用されています。

映像で物語化する手法で 「共感・心のふれあい」へ

日本国内でも、教育現場やNPOなどでこの活動に取り組んでいる方々がいらっしやったので、東日本大震災支援に活用している神奈川のボランティアグループの協力を得て、DSTの実施に手を挙げた鶴見国際ラウンジ(横浜市国際交流協会運営)のボランティアチーム(交流部会)により、

DSTを応用した新しい交流イベント「ビデオ上映と対話のつどい～外国人制作!映像+日本語スピーチ～」が2012年7月に実現しました。

このイベントは、「こども時代と将来の夢」をテーマに、以下の「5段階の流れ」で実施されました。

まず、①イベント開催1か月前、5～6人のグループで、伝えたいテーマについて語り合う「ストーリーサークル」を実施します。②その2週間後、「自分の言葉」で短い物語にしたナレーション原稿を書いて表現し、③自分自身の声で「語り」を朗読・録音し、④その内容やイメージに関連する画像(写真・イラストなど)や音楽を組み合わせて、一つの「物語」(数分の映像作品)をパソコンで編集・制作します。そして、⑤制作者や関係者の前でビデオ作品を上映して経験や思いを映像で伝え合い、感想を出し合う対話型交流(共有)を行うものです。

この手法では、ビデオ作品として形が残っていることから、(1)会場の雰囲気などによって発表者が影響を受けず、常に同じ内容で伝わる、(2)「国際理解(教育)の教材」としての活用や、インターネットで自ら情報発信が可能、(3)上映中、制作者自身も視聴者の一人として客観的に見る事が可能、(4)視聴者にとっては、ナレーションや映像などにより、当時のことが具体的に再現・イメージでき、印象深く体感できるといった利点があります。

さらに、外国人が心の内をさらけ出したことで、人々の心に響き共感を生み出していきました。結果、自然と互いの声に耳を傾け、共に悩み、考え、

深い対話を生み出すなどの効果を発揮し、多文化共生の大切な目標の一つ「共感・心のふれあい」を感じていただくことができました。



ビデオ上映前に、自身の思いを語る外国人制作者

「物語」の手法によって、「声無き声・心の叫び」が明らかに

2012年の成果を受け、第2回として2013年3月には「生活上の課題」というテーマで、ブラジル、ペルー、キルギス、中国、フィリピン、インドネシア、ミャンマーの高校生・大学生や社会人など計11人の外国人たちが抱えている悩みや困っていること、日頃の思いについて、「まちは家族」「頑張る社会といじめ」「子どもたちに伝える夢」「私の永遠の課題」といったビデオ作品を作り、発表していただきました。

映像で「物語化」する手法「DST」によって、今まで語られることのなかった、新たに掘り起こされた外国人の「声無き声」や、なかなか伝わってこない外国人の「心の叫び」「心の深い思い」が明らかにされ、これまでと異なる理解・感動・共感を生み出しました。

また、完成までの流れそのものが「生きた日本語学習」という副次的な効果もありました。ビデオ作品を見た後は、5つのテーマ「若者の声」「学校教育（いじめ）」「教育」「文化／地域」「外国人女性の不安」ごとにグループに分れ、同じ仲間として自分の問題ととらえ、ビデオ制作者と参加者が一緒に解決方法について話し合いました。

手法の成果

映像を制作した外国人からは、「日本人の前で日本語で話すことに自信がなかったが、今回の上

映で感動、共感、称賛といった反応があり、自信になった」、「日本に住んで初めて、自分の話を真剣に聞いてくれる場があった」、「ビデオ制作を通じて、自分の問題を客観的に冷静に考えることができ、今後の希望や勇気が生まれた」など、自分を認めてもらえたという経験が影響し、制作・上映の後、心の変化や気持ちの移り変わり、行動の変化につながったケースがありました。

加えて、「外国人からの相談件数トップ10」といった統計的なデータではなく、一人一人の人生のドラマには必ず意味があるということが、今回のビデオ作品を通して明らかになり、そこに多くの人々に「共感」していただきました。



ビデオを制作した外国人と少人数で交流を深めた「グループ別対話」

参加者の声と今後の方向

ビデオ作品を見た参加者からも、「文字だけじゃなくて、映像と音声（ナレーション）で、その人の日常が生き生きと浮かび上がってきました」、「日本で生活している外国人の気持ち、日常的問題や悩みがよく分かり、かつ、共感できました」などの意見が寄せられました。

今後は、外国人たちと交流し、寄り添うきっかけとして、「ビデオ作品」を上映する機会をつくり、多くの支援関係者が話し合う機会をどれだけ実施できるか、また、一方で、新たにビデオ作品づくりにチャレンジしたい外国人の発掘や、DST手法を活用したい団体への「技法」の伝授も重要な役割の一つであると考えています。

※記事の内容に関する詳細や報告書は ホームページをご覧ください。

<http://www.yoke.or.jp/>

トップページ 左下【サイト内検索】にて「鶴見 ビデオ」で検索